公正を求める子ども

津守　真

Sくんはことばを話さない。敏感な感受性をもち、内心傷ついたり悩むことが多いが、自分から表現することが少ない。この四月以来、自分で動くことが多くなり、安心してみていられるようになってきた。

四月のある日、私と一しょに職員室にいったが、廊下にある温飯器の扉を開いて、いくつかの弁当の中からひとつを取り出した。私はそれがだれの弁当か分からず、他の人のだったらその人が可哀想だからと言って制したが、Sくんはそれを校長室の机の上まで持ってきてしまった。私は傍に腰をおろし、だれの弁当だろうとなだめながら、この子どもの

好むはさみと折紙などを選んできた。Sくんは机の上に弁当をおいたまま、手をひざにおいてじっと坐っている。

通りかかった他の大人が、この模様の弁当包はだれのかきぎにいってあげようと、担任にたずねてくれたところ、それはSくんの弁当だと判明した。私はSくんに申し訳ないことをしたと思った。

私がそのことを分かり、あやまると、それまで弁当を机の上においたままだったSくんが、直ちに身体の表情をくずし、顔をほころばせて弁当を食べはじめた。この子どもは、ことばを話さないけれども、自分が不当に扱われたことを分かっていた。誤解がとけて、この子の心が晴れたとき、この子は活動しはじめた。ことばを話さないからといって、社会的公正さを欠いてはならないことを、私はこのとき悟った。

そのとき私も一緒に弁当を食べていたが、Sくんは自分のを食べ終わると、私の弁当を引き寄せて、残りを食べてしまった。この子が私の弁当を食べたのははじめてのことである。一度は憤慨したであろうSくんが、私に対して打ち解けてくれたことを私は感じた。

その日の午後、Sくんともうひとりの子どもが、一台のテープレコーダーを囲んで、「お母さんと一しょ」のテープをきいていた。もうひとりの子どもは同じ箇所を繰り返してききたいし、Sくんはそれが気に入らず、全曲通してききたい。二人のとり合いの間に

私は入ることになった。先刻のようなことがあった後であり、私はSくんが公正に扱われていると感じてほしかった。しかし、このような場合、大人の道徳規準をもち出して、順番にと言って済むことではない。もうひとりの子どもには、テープの同じ箇所を繰り返しきかなければいられない、この子の内心の危機がある。いろいろと試みた末に、私はもう一台テープレコーダーを探してきた。ところがもうひとりの子どもは二台あることが気に入らず、古い方のテープレコーダーを捨てにいってしまった。話はまだつづくのだが、Sくんは、私がこうして二人に公平にするよう努力していることを認めてくれたらしい。それから数日、取り合いをしながらも、そのやりとりする活気をお互いにたのしんでいるように思える。

複数の子どもたちが一緒に生活する場で、それぞれの子どもの訴えに耳を傾けるのは容易でないが、具体的な状況のひとつひとつにあたってそれをしてゆかないと、私共はいつのまにか大人に都合のよいように環境をつくりかえてしまう。そして子どもの重大な権利を侵害して気付かなくなってしまうのが恐ろしい。子どもによっては、無言の反論をくり返してもきいてもらえない誤解が積み重ねられることがある。ぼくは一体どう生きたらいいのだろうという問いを発しつつ、次第に無表情になってゆく子どももいる。

今年は、ユネスコの子どもの権利宣言の修正案が批准される年である。子どもたちは、社会で、人間として公正に扱われる権利をもっている。学校や施設は、それを侵す危険をいつもかかえている。子どもの内心の訴えがきかれているかどうか、子どもの選択の自由のある空間と時間が備えられているかどうか、私共は常に問い直してゆかねばならない。

（愛育養護学校）